

60356

教科書文庫

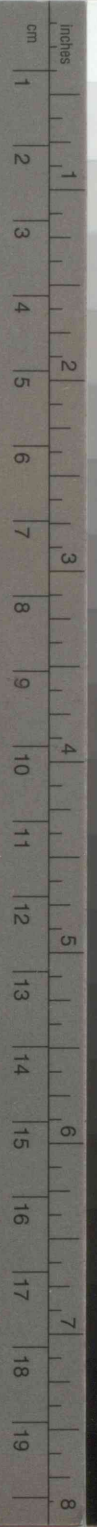
6
810
34-1949
01304 49879

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書

教育部
資料室

柳田国男編



KC
T072

教
34
013

あたらしいこくご 三年上



中央図書館

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449879

昭和二十四年十月十日
小学校国語科用
文部省検定済

あたらしい
こくご

三年

広島大学図書

0130449879



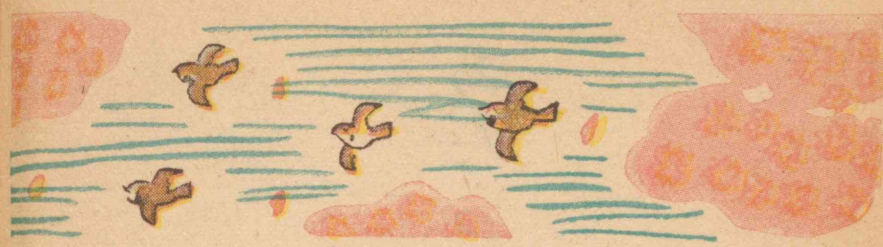
広島大学
教育学部図書

東京書籍株式会社

広島大学図書

0130449879





もくろく

一 花……………四

二 たんじょう日……………十三

三 つばめ……………二十八

四 ゆきしかさん……………三十八

五 ぼくの作った

おもちゃ……………五十三

六 病気をふせごう……………六十三

(一) はえ

(二) ふどんほし

七 作文……………七十一

八 たてもの……………七十八

(一) あき地の家

(二) いろいろのたてもの

九 水の話……………九十五

べんきょうの手びき……………百十五

あたらしく出たおもな

ことば……………百二十五

あたらしく出たかんじ……………百二十九



一花

(一)

春の 野はらを 歩いて 行った。
すみれや たんぽぽや れんげの 花が
いちめん さいて いた。

ぼくは たんぽぽの きいろい
花びらを 取って
ふっと ふきとばした。



花びらは ひらりと
風に まって とんで 行った。

ピーチク ピーチク ひばりの 声が した。
見あげると 高い 高い 空に
白い 雲が ぽっかり うかんで いる。
ひばりは あの 雲の 上を
とんで いるの だらうか。

すみれや たんぽぽや れんげの 花に
雲の かげが うつつて いた。



(二)

つつみの さくらが うつ
くしく さきそろいました。
わたくしたちは 先生と い
っしょに つつみへ 行きま
した。

さくらの 花びらが 雪の
ように まいおちて います。
みんなは 花の 下に こ
しを おろしました。



先生「さあ、みんなで しっ
て いる 花の 名を
できるだけ いって
みましょう。いとうく
ん、みんなの い
名を ちょうめんに
書いて ください。」

ふじた 「さくらの 花」
さみず 「うめ」
よしむ 「もも」
らさん 「すみれ」
くどい 「すみれ」



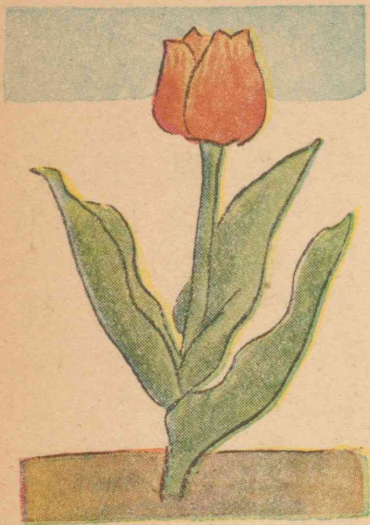
みんなが つづけました。
いとうくんの ちょうめんには、花の 名が だんだん
ふえて いきます。

れんげ。たんぽぽ。なのはな。あやめ。すいせん。
チューリップ。ぼたん。きく。朝がお。夕がお。ゆり。
ばら。なでしこ。ふじ。つばき。コスモス。ダリヤ。ひ
まわり。はす。おみなえし。月見そう。はぎ。ききょう。
ふくじゅそう。やまぶき。

先生「みんなて いくつに なりましたか。」
いとう「二十九です。」
先生「では、春に さく 花を 行って みましよう。」

くたむら 「さくら。」

みんな ひとつ わらいました。わらいが しずまって
から、みんなが つぎつぎに もも やまぶき れんげ
たんぽぽ すみれ チューリップなど、春に さく 花の
名を いいました。



つぎに、みんなて 夏に さく 花を 考えました。
朝がお。ゆり。あじさい。ぼたん。
ひまわり。
秋に さく 花を 考えました。
きく。コスモス。はぎ。ききょう。
う。おみなえし。

先生「では、冬に さくのは 何でしょう。」

みんなは きゆうに だまって しまいました。

先生「冬には 何の 花が さきますか。」

しみずさんが 小さな 声で いいました。

しみずさん「ふくじゆそう。」

先生「そうですね。ふくじゆそうは 正月の ころに さ

きますね。ほかに ありませんか。——すいせんも

冬の 花ですね。」

先生「大きな 花の 名を 行って ごらんなさい。」

くすどう「はすの 花。」

くむら「ひまわり。」

先生「もつと もつと 大き

な 花が ありますよ。

あつい 南の 国では

さしわたしが 一メー

トルあまり、重さが

七キロ 近くも ある

ラフレツシアと いう

花が さきます。これ

が せかいじゆうで

一ばん 大きな花です。」



先生「朝早くさく花の名をいってごらんなさい。」

いとう「朝がおです。」

先生「朝がおより早くさく花がありますか。」

さしみず「はすの花です。」

先生「そうです。はすの花は朝まだうすぐらい

うちにさきますね。それでは、こんどは夕がた

さく花の名をいってごらんなさい。」

くやまだ「夕がお。」

さすき「月見そう。」

二 たんじょう日

(一)

四月二十三日がよし子さんのたんじょう日です。

「よし子のたんじょう日が来ますね。なかよしの

友だちをよんであげましょね。」

と、おかあさんがいいました。

「まあ、うれしい。あつ子さんとかずえさんとみち子

さんと——。」

よし子さんはゆびをおってかぞえながら、

「それから やす子さんと
はるおさんと ただしさん。
六人ですよ。」

と いいました。

「よし子の 大すきな おま
んじゅうを 作って あげ
ましようね。」

「まあ、うれしい。」

よし子さんは 手を たた
いて よろこびました。



(二)

九時が になりました。やくそくの 時間は あと 一時
間です。よし子さんは さっきから 時計を ながめて
いますが、少しも はりが すすまないように 思われま
す。

「ごめんください。」

よし子さんは だれが 一ばん 先に 来たのかしらと、
むねを わくわく させながら 大いそぎで げんかんに
出て みました。

となりの おばさんでした。

よし子さんは がっかりしました。

みんな 早く 来て くれれば よいのにど、よし子さ

んは まちどおしく 思いました。

「ごめんください。」

よし子さんは こんどこそと

思いながら げんかんに 出て

みました。

あつ子さんでした。

「よし子さん、おめでどう。」

あつ子さんは にっこりと あ

いさつを しました。



「ありがとうございます。」

よし子さんも うれしそうに 答えました。

まもなく 六人の 友だちが そろいました。

「みなさん よく いらっしやいました。こう して み

なさんが よし子の たんじょう日を いわって くだ

さるのは ほんとうに うれしい ことです。何も あ

りませんが、きょう 一日を たのしく おくりましよ

う。わたくしも なかまに 入れて ください。」

おとうさんが そう いました。おかあさんも ねえ

さんも 出て 来ました。



ごちそうを いただきてから いろいろな ことを して
あそびました。

ただしさんが 立って 「ねずみの ちえ」の 話を しまし
した。

つぎに あつ子さんと かずえさんが ふたりで、

「どっど の あかちゃん かわいいでしょ。」

と、うたいながら おどりました。大へん じょうずなの
で、みんな 手を たたきました。

「わたくしは みんなのように うたも じょうずでは

ないし、おどりも できないから 『なぞなぞ』を 出しま

しょう。わかった 人は 手を あげて 答えて くだ

さい。

と、おとうさんが いいました。

「けずれば けずるほど 大きく

なる ものは 何でしょう。」

みち子さんが すぐ、

「はい。」

と、手を あげて 答えました。

「それは 板の あなです。」

「その とおり。では、つぎの

なぞ。——小さな へやに 小

ぼうずが 千人は 何でしょう。」

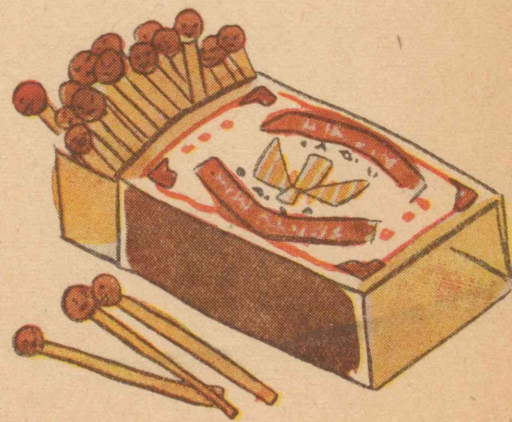
こんどは あつ子さんが、
「マッチばこです。」

と 答えました。

「それでは 少し むずかしい
のを 出します。——まい朝
まいばん 一本道を 走る
ものは 何でしょう。」

だれも 手を あげません。

「むずかしいかな。——それは 雨戸です。まい朝 まい
ばん がらがらと しきいの みぞを 走るでしょう。」
みんなは ああ そうだったと 思いました。



(三)

こんどは 「十の とびら」を する ことになり
ました。十かいの しつもんで あてる あそびです。ねえさんが
もんだいを 出しました。

さね 「それでは はじめますよ。きょうの もんだいは
みんな 鳥です。さあ、一ばん目の 鳥は 何でし
ょう。」

さあつ子 「それは、空を とびますか。」

さね 「はい、とびます。」

さだし 「高い 空を とぶのですか。」

さねんえ 「いいえ、そう 高くは とびません。」

やすんち 「どこでも 見る ことが できますか。」

さねんえ 「はい、大てい 見る ことが できます。」

やすんち 「その 鳥は 米が すきですか。」

さねんえ 「はい、とても すきです。」

やすんち 「すすめですか。」

さねんえ 「そうです。五もんで

あたりましたね。それ。

では 二ばん目に う。

つりましょう。」

さよし子 「それは すずめより

大きいですか。」

さねんえ 「はい、ずっと 大きい

鳥です。」

さかずんえ 「にわとりよりも 大き

いですか。」

さねんえ 「そうですね。少し

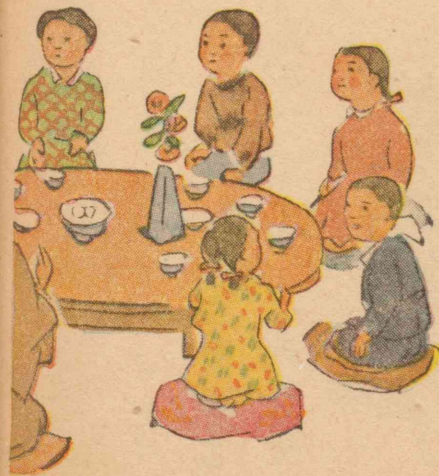
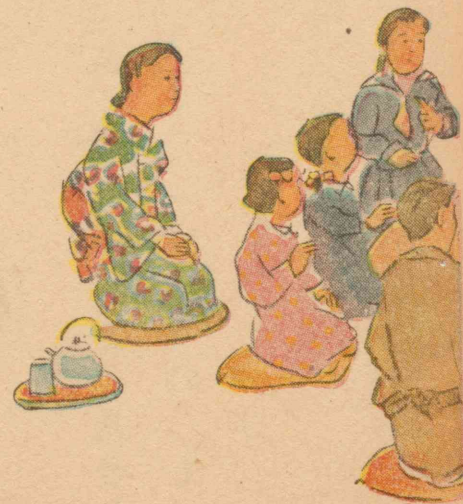
大きいでしょう。」

ただんし 「水の上を およぎますか。」

さねんえ 「はい、じょうずに およぎます。」

ただんし 「では その 鳥は よちよち あるきますね。」

さねんえ 「はい、その とおり。」



ただし「それは あひるです。」
さねん「あたりました。ただしさん」

に「じょうずに あてられ」
て「しまいました。こんど」
は「少し むずかしいのを
出します。」

むずかしいと いわれたので みんな かおを 見合わ
せました。はるおさんが 元気 よく 一ばん目の しつ
もんを します。

さねん「その 鳥は 日本の 国に いますか。」
さねん「はい、日本の 国に いる 時も あります。」



さみち子「では どうぶつえんに いますか。」

さねん「いいえ、いないと 思います。」

さねん「それは 黒い 鳥ですか。」

さねん「そう、黒い 所も あります。」

さよし子「それは あひるより 大きいですか。」

さねん「いいえ、あひるより ずっと 小さいです。」

みんな むずかしいので 考えこんで しまいました。

さねん「そう むずかしくは ないのですよ。まだ 六もん
のこって いますから どんどん しつもんして
ください。」

それでも みんなは だまって 考えて います。する

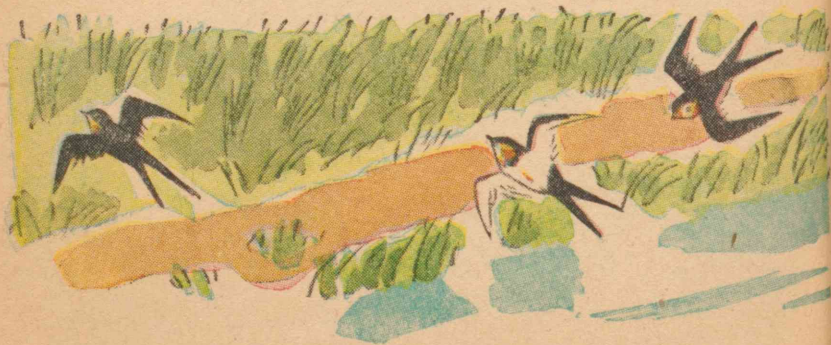


さみち子 「つばめです。」
 さねんえ 「あたりました。つばめはまい年 あたいたかい 春に なるど、南の 国から 海を わたって 日本 の 国へ とんで 来ますね。そうして すすしく なると また 南の 国へ 帰りますね。」

と、おかあさんが にここにこ して しつもんしました。
 さおかあ 「では、わたくしに 一つだけ しつもんさせて ください。——その 鳥は どおい どおい 国から 海を わたって、日本の 国へ とんで 来る 鳥 ですか。」
 さねんえ 「その とおりです。わたり鳥です。」
 みんな ああ わかったと いう かおを しました。
 さねんえ 「さあ、もう わかったでしょう。みち子さん、いつ て ください。」
 さみち子 「それは 汽車よりも 早く どぶ 鳥ですか。」
 さねんえ 「そうです。その 鳥の 名は。」



つばめ すいすい
 たんぼを とぶよ。
 いねに すれすれ
 ひらりと とぶよ。
 つばめ すいすい
 やなぎを とぶよ。
 白い はら 見せ
 ひらりと とぶよ。



三 つばめ
 (一)
 つばめ すいすい
 小川を とぶよ。
 水を かすめて
 ひらりと とぶよ。



(二)

四月十日 月より日 雨

二わの つばめが のき下の すから とび出しては
また 帰って 来る。 えさを さがしに とんで 行くの
だ。 二わが いっしょに とんで 行く ことも ある。
一わが のこって、 とんで 行った 一わを まって い
る ことも ある。

「ずいぶん 早く とんで 行くね。」

と、 にいさんに いうと、

「汽車よりも 早いんだよ。」



と、 にいさんが いった。 ぼくは 小さな つばめが ど
うして あんなに 早く とぶ ことが できるのたる
うと、 ふしぎで たまらなかつ
た。

四月十九日 水より日 晴

「あさお、 来て ごらん。」

おもてで にいさんの 声が
した。 行って みると、 にいさ
んが はしごの 上で つばめの すを のぞいて いた。
「つばめが たまごを うんだよ。」

「ぼくにも 見せて。」

と、ぼくも そっと はしごを あがって すの 中を
のぞいた。小さい たまごが 五つ、かたまつて いた。

四月二十一日 金よう日 晴

おかあさんつばめは、たまごを あたためて いる。お
どうさんつばめは、えさを さがしに とびまわって い
る。

「いく日ぐらいで、かえるの。」

と 聞くと にいさんは、

「二しゅう間ぐらいだよ。」

と おしえて くれた。

ぼくは つばめの ひなの 生まれるのが まちどおし
くて ならない。

五月四日 木よう日 晴

学校から 帰って のき下を
見あげると、チイチイチイと
いう なき声が 聞えた。

「あっ、かえった。」

ぼくは うれしく なって、

しばらく そこに 立って 見て いた。



二わの 親つばめが、えさを も
って どんで 来る。小さな 五わ
の子つばめは、すの 中から 首
を のばして 口を 大きく あけ
ながら、チイチイチイと やか
ましく なきさわぐ。おながが す
いて いるんだなど 思った。

五月六日 土よう日 くもり

きよう、先生が つばめの 話を して くださった。
つばめは わたり鳥で あたたかい 春に なると、と



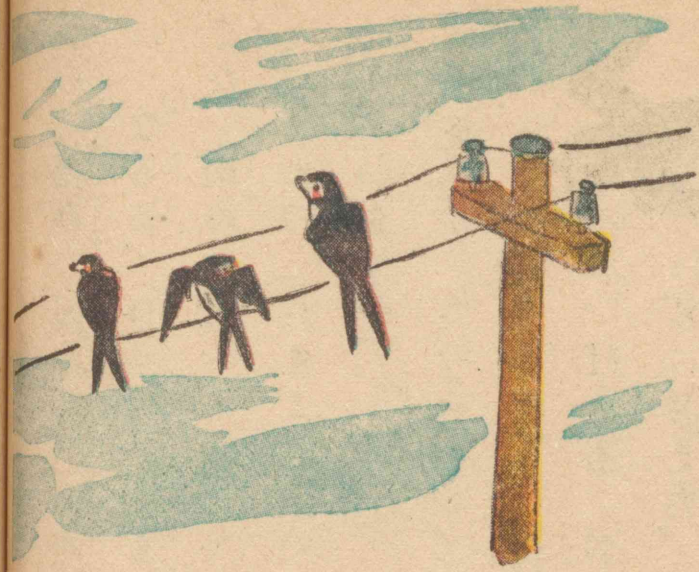
おい 南の 国から 日本へ どんで 来る。そして 秋
に なると、日本で 生まれた 子つばめと いっしょに、
また 南の 国へ 帰って 行くのだそうだ。
「つばめの たまごは、いく日ぐらいで かえるか しっ
て いますか。」

と、先生が たずねたので、ぼくは すぐ 手を あげて、
「二しゅう間ぐらいます。ぼくの 家の つ
ばめも おととい かえりました。」
と 答えた。



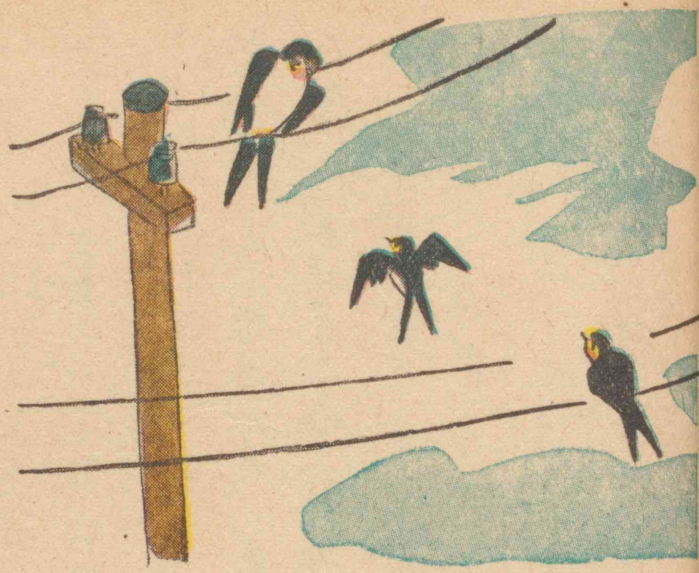
五月二十八日 日よう日 晴

朝、のき下を見ると、つばめたちのすがたが見えない。おかしいなど思っている、むこうの方で



チイチイチイとなく声が出た。
ぼくはいそいで声のするおもての方へ走って行った。

うのだらうと思つた。



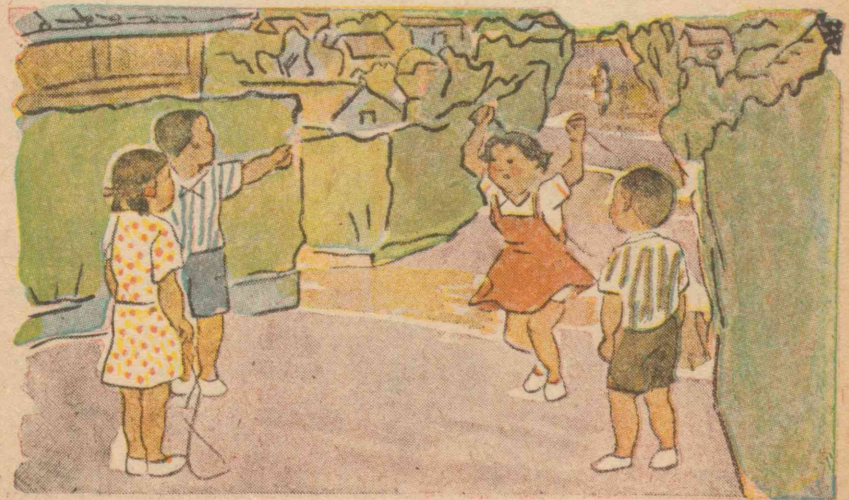
思つて見ているうちに、一わの子つばめがチイチイとなきながらむこうがわの電線にとびうつつた。つばめたちは、むこうの電線とこちらの電線とを行ったり来たりして、とてもたのしそうだった。うまくとべるようになって、

四 ゆきしかさん

(一)

夕がた はるおさんと だし
さんと よし子さんと あつ子さ
んが、はるおさんの 家の 前で
なわとびを して あそんで い
ました。

一つ 二つ 三つ 四つ 五つ、
みんなの かぞえる 高い 声



が 道に ひびいて います。

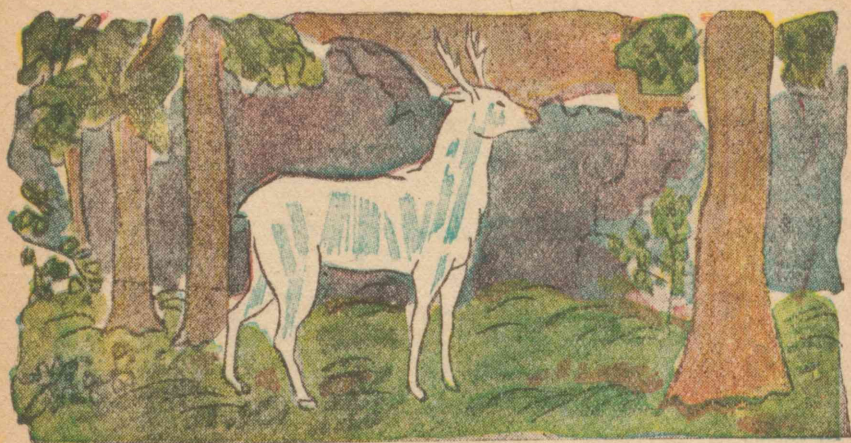
その 時、いつも いっしょに あそんで くれる ね
えさんが、むこうから 赤い 夕日を あびながら やっ
て 来ました。

ねえさんは 五年生です。いつも 三年生の はるおさ
んや ただしさん よし子さん あつ子さんたちに、いる
いるな おもしろい お話を して くれるのです。

「さあ、みんな こちらへ いらっしゃい。」

ねえさんが いいました。みんなは ねえさんを とり
まいて わを 作りました。

「きょうは ゆきしかさんの お話よ。——ある 山の



中に 大きな ほらあなが あって、そこに 一ぴきの
しかが すんで います。その しかの つのは ぎん
色で、からだは 足のつめまで 雪のように まっ白
なのです。それで みんなは その しかを ゆきしか
さんと よんで います。子どもたちが ゆきしかさん
の 所へ あそびに 行くと、ゆきしかさんは 大へん
よろこんで、『よく 来ましたね。おもしろい ものを
見せて あげましょう。さあ、この せなかに 乗って、
そして この ぎんの つのを 手で もって ごらん
なさい。』とおい あ の 山の むこうの もう 一つ
むこうの 山に、きらきらと かがやく ものを 見に

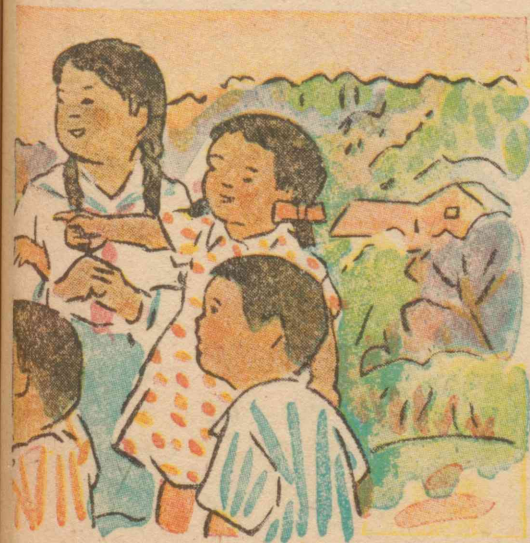
行きました。その きらきら
した ものを 見た 人は、だれ
でも りっぱな よい 人に な
れるのです。さあ、乗って ごら
んなさい。』と やさしい 声で い
って くれるのです。
ねえさんは そう 言って こと
ばを きりました。
「おもしろいね。ぼくらも その
ゆきしかさんの せなかに 乗っ
て きらきら かがやく ものを

見たいね。ゆきしかさんは どこに いるのかしら。」
はるおさんが いいました。

「それは だめよ。この お話は 本に 書いて あった
のですから。わたしだって 行って みたいのですけれ
ども——。」

ねえさんが ざんねんそうに
いいました。

「そんな ゆきしかさんが ほん
どうに いたら いいのね。
あの 山に いないかしら。
よし子さんが むこうの 山を



ゆびさしながら いいました。

「さあ。」

ねえさんは 考えるように



して、山の 方を 見ました。ねえさんの かおは 夕や
けの 色が うつつて もえるように 赤く 見えました。
ねえさんの かおを 見て いると、みんなは なんだか
ゆきしかさんが むこうの 山に いるような 気が し
て きました。みんなは 山の 方を じっと 見ました。
山は 夕もやの 中に 青く かすんで います。

(二)

はるおさんと ただしさんと よし子さんと あつ子さん
んの 四人は、きのう ねえさんの お話を 聞いてから
なんだか むこうの 山に ゆきしかさんが いるような
気が して なりません。それで きょう これから 山
へ 行って、ゆきしかさんを さがして みようと いう
ことに なりました。

四人は いさんで 出かけました。歩いて いる うち
に ゆきしかさんが ほんとうに いるように 思われて
きました。

すこし 行くと 小さな 川が ありました。川から
三びきの あひるが あがって 来ました。よちよちと

歩いて 行くので、四人は おかしく なって わらいま
した。

「ゆきしかさんの 所へ この あひるを つれて 行っ
たら、ゆきしかさんも わらい出すだらうね。」

と、はるおさんが もう ゆきしかさんが いるかのよう
に いいました。

その 時、二わの つばめが 四人の あたまの 上を
すうい すういと どんで 行きました。あまり 早いの
で みんなは びっくりしました。

「あんなに 早く とべたら ゆきしかさんの 所へ す
ぐに 行けるんだけどね。」

と、よし子さんが いました。

「つばめさん、乗せて 行って くれなにか。うらしまを
乗せた かめさんのように ぼくらを 乗せて 行って
くれなにか。」

と、ただしさんが いましたので、みんなは また わ
らいました。つばめは へんじも しないで やっぱり
すうい すういと どんで いました。

すこし 行くと、道の そばの くさはらで やぎが
一ぴき くさを たべて いました。おいしそうに 音を
たてて たべて いました。四人は しばらく 立ちどま
って 見て いました。

「やぎさん おじいさんでも ないのに ひげなんか は

やしたり して おかしいわね。」

と、あつ子さんが いました。

「白い ひげだね。ゆきしかさんは

これより もっと 白いのかしら。」

と、ただしさんが いました。

「それは ずっと ずっと 白いよ。

ゆきしかさんなんてすもの。」

よし子さんが もう ゆきしかさん

を見て 来たように いました。

「さあ いそごうよ。」



ど、はるおさんが いいましたので、みんなは また あ
るき出しました。

大きな かばんを かたに かけた ゆうびんやさんが、
むこうから いそぎ足に 歩いて 来ました。

「わたし もし ゆきしかさんに あえたら、おじいさん

の 所へ 手がみを 書くわ。そ

して あの ゆうびんやさんに

もって 行って もらおうかしら。」

ど、あつ子さんが いいました。

山に つきました。竹やぶが 青

青と からだを ゆすぶって いま



した。そこを とおりぬけてから、こんどは たくさんの
木が とおせんぼを して いるような えだの 下を
くぐって、木の しげみの 中へ はいって 行きました。
手で のけた えだが、かおに はねかえって 来たり
しました。手で つかんだ つるのような えだに とげ
が あって、手に きずを したり しました。けれども
四人は そんな ことに まけては いませんでした。ゆ
きしかさんは いなか ゆきしかさんは いなかと
思っ、いっしょうけんめいに のぼって 行きました。
ほらあなは ないかと、みんなは のぼりながら そこら
じゅうを 見まわしました。でも ほらあなは 見つか

ませんでした。

「もっと のぼろうよ。」

はるおさんが いいました。

みんなは 元気を 出して

歩きました。少し 上の 方

に 大きな 岩が 黒い あ

たまを 出して いました。

そこは 木が なく、方々が

見られるように なって い

ました。そこへ 行けば な

んだか ほらあなが 見つか

るような 気が しました。みんなは ひとりでに 走っ
て 行きました。

けれども そこにも ほらあなは ありませんでした。

岩の 上に のぼって みんなが かわるがわるに あち

ら こちらを 見まわしましたが、やっぱり どこにも

ほらあなは 見つかりませんでした。

とおくを 見ると、夕やけの 空が 赤い ふとんのよ

うに ひろがって いました。あたまの 上を 見ると

白い 雲が ゆっくりと 動いて います。いろいろな

かたちの 雲が 動いて います。きんぎょのような 雲

や あひるのような 雲が 動いて います。





「あつ、しかだ、しかだ、ゆきしかさんみみたいだ。」

とつぜん はるおさんが さけびました。みんなが はるおさんの ゆびさす 方を見ると、しかのかたちをした 雪のように 白い 雲が ふうわりと ういて いました。

「わっ、ゆきしかさん、ゆきしかさん。みんなは 空まで とどくほど 大きな 声で さけびました。」

五 ぼくの 作った おもちや

(一)

ぼくは ときどき いろいろとや おとうとに おもちやを作った やる。

この 間 ぼくの 家に だいくさんが やって 来て だいどころを なおして くれた。その 時、木の 切れはしを たくさん くれた。三角のや ま四角のや 長四角のや いろいろな 形の ものが あった。ぼくは その 木ぎれで いろいろの みち子に つみ木を 作って

やった。

いつか先生に おそわった とおり、切れはしの中、
から 形の よい ものを えらび出して 赤、青、き、
みどり、白などの 色を ぬった。
みち子は 大よろこびだった。汽
車だの 自動車だの 家の 形だ、
のを つみあげては あそんで
いる。

おかあさんも よろこんで、

「こんどは みのるにも 何か
作って あげなさい。」



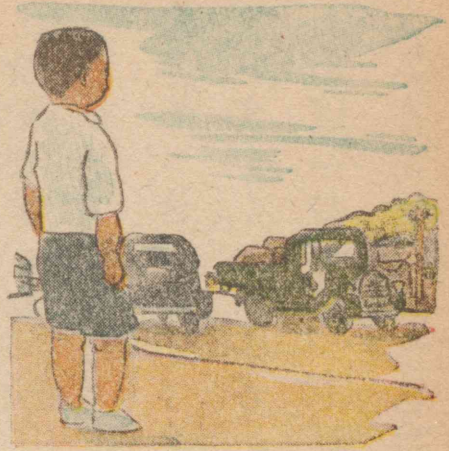
と おっしやった。

「みのるちゃん、何が ほしいの。」
と、ぼくが 聞くと、

「自動車。トラックでも いいよ。
と、みのるが 答えた。

なかなか むずかしい ちゅう
もんを する。ぼくは まだ 自
動車を 作った ことが ないの
で、うまく できるか どうか
しんぱいだった。しかし 何とか
くふうして 作りあげて みようと
思った。





(二)

自動車を作るにはよくじつぶつを見なければならぬ。と思った。ぼくはどおりに出で、トラックや乗用車を見た。

がめた。それからえ本に自動車のえがあった。ご
とを思い出してひらいてみた。

ぼくはえ本を手本にしてトラックを作ることにした。

ちやうどよい板が見つかったので、それを車の

台にすることにした。

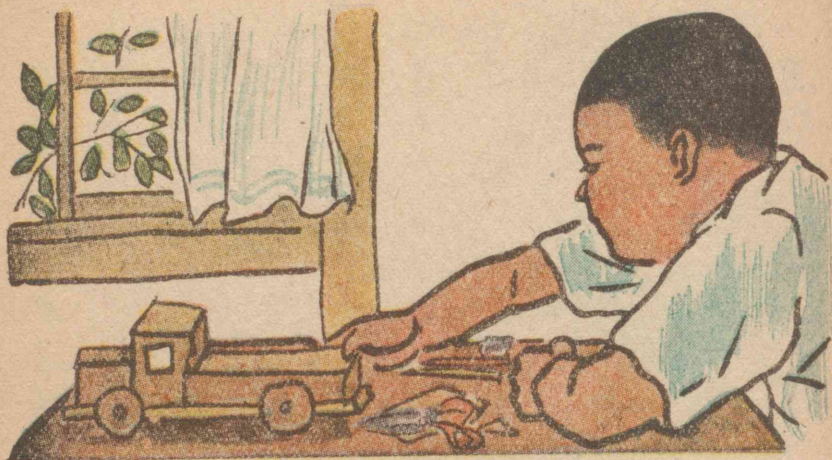
車はボールがみをまるく切って作ってみたが、少しうすいので、三まいかさねてのりではり合わせた。

車のしんぼうには竹のはしを使った。

板のはばは十センチな

ので、しんぼうの長さはそれより二センチぐらい長くしたらよいと思った。ぼくははしを十二センチずつ同じ長さに切った。つぎに車のまん中





に きりて あなを あけて、はしの 先を その あな
に さしこんだ。

板に あなを あけ、はりかねを とおして 車を し
っかりと つけた。

つぎは 車体を 作ろうと 思った。材料は ボールが
みを 使って、上に 色がみを はる ことに した。

車体は かんたんに 作れたが、車体を 板の 台に
はりつけるのに ほねが おれた。めんどろに なって
もう やめようかと 思ったが、

「まだ なかなか できないの。」

と、みのるが 何ども 見に 来るので、どう しても

作ろうと 思った。

おかあさんが ぼくの こまっ

て いるのを 見て、

「ごはんつぶで つけたら よい
でしよう。」

と おしえて くださった。

ごはんつぶで つけると、うま

く 板の 台に はりつける こ

どが できた。

ようやく トラックが できあ
がった。

ぼくは みのるを よんで、
「できたよ。」

と いうと、みのるは 手を たたいて よろこんだ。

ぼくが ボールがみや のりを
かたづけて いると、みのるが
つまらなそうな かおを して
もどって 来た。

「にいさん、車が 動かないんだ
よ。」

と いった。

ぼくは みのるに こう いわ



れて こまった。車が 動くように
するには どう したら よいだろう
かと しばらく 考えた。
そうだ、車の しんぼうを 少し
太い 竹に とおせば よいと 思
った。

ぼくは 車を 台から はずして
その かわりに 竹を むすびつけ

た。そして かた方の 車を はずして しんぼうを 竹
に とおした。

動かして みると、こんどは うまく 動く。ぼくは

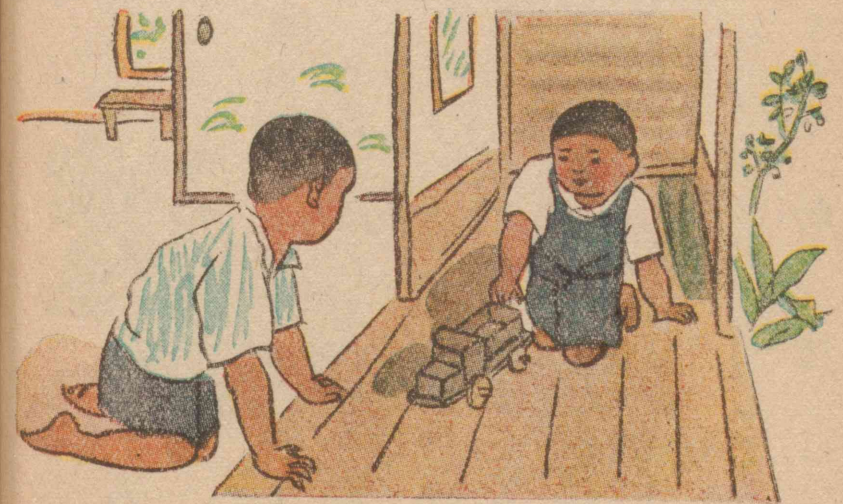
うれしく なって 大きな 声
で みるるを よんだ。

みるるは さっそく トラッ
クを えんがわに 持ち出した。

「ぼくの トラックが 走るよ。
ブーブーブー」。

ど いって、えんがわを おし
て まわった。

みるるは とても うれしそ
うだ。
ぼくも うれしかった。



六 病気を ふせごう

(一) は え

ちようちフスや セきりは おそろしい
病気です。ちようちフスや セきりの ば
いきんが ついて いる たべものを 知
らずに たべると、その 人は ちようち
フスや セきりに なります。

はえは こう した おそろしい 病気
のもとに なる ばいきんを はこぶ





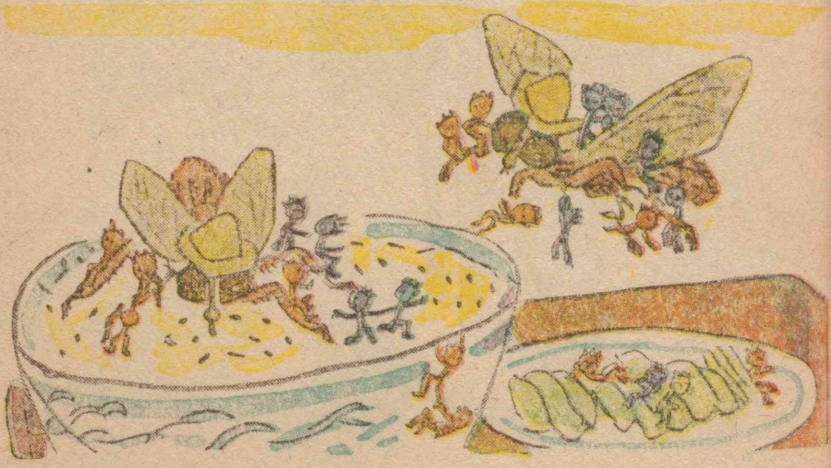
わるい 虫です。

はえは きたない ごみばこ
 や べんじょなどで 生まれま
 す。どこへでも とんで 行っ
 て、いろいろな ばいきんを
 わたくしたちの たべものの
 はねや 足に つけては

上に とまります。
 せきりに かかった 人が いますと、その 人の 大
 べんの 中には せきりきんが たくさん まじって い
 ます。

はえは そんな 所へ とんで 行って せきりきんを

たくさん からだに つけ、また
 ほかの 所へ とんで 行きます。
 はえの からだに ついて いる
 せきりきんは どこにでも 落ち
 ます。おかずの 上に とまれば、
 そこに 落ちます。はしに とま
 れば そこにも 落ちます。それ
 を 知らずに たべると、その
 人は せきりに なります。
 こんな ふうに して はえは
 おそろしい 病気を 人から 人



へと うつします。

あつい 夏は はえが 一ばん ふえる 時です。みんな
なで はえを たいじしましょう。

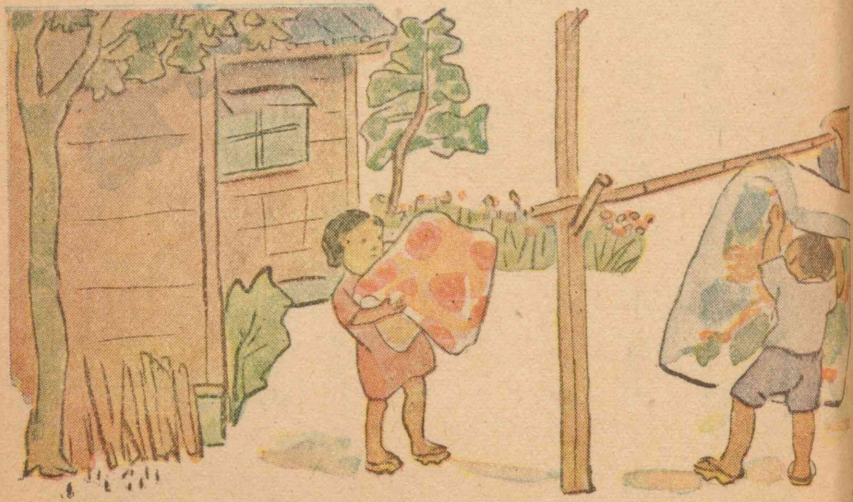
(二) ふどんほし

きょうは よく 晴れて 雲
一つ 見えない。

おかあさんが 夜具を ほす
と おっしゃったので、わたくしは
にいさんと いっしょに
手つだった。



「おかあさん、なぜ たびたび
夜具を ほすのでしょね。」
「もし 夜具に ばいきんが
ついて いたら いけないか
らです。日光には ばいきん
を ころす 力が あります。
それに ほした ふどんに
ねると、ふかふかと して
あたたかいでしょ。これは
ふどんの わたの しめりけ
が なくなるからです。しめ





った ふとんは からだの ために わるいのです。
 おとうさんは ざぶとんを 持ち出して 日の あたる
 えんがわに ならべて いらっしゃった。

「そうだ、きょうは 天気がいいから 少し 家の ま
 わりを きれいに しよう。みんなも 来て ござらん。」
 おとうさんは こう 言って にわの 方へ 出て い
 らっしゃった。

「せきゆにゆうざいの のこりは まだ あったかな。
 おとうさんは ひとりごどを いいながら 小屋の 中
 を さがして いたが、やがて ブリキかんを さげて
 出て いらっしゃった。

おとうさんは 古バケツの
 中で せきゆにゆうざいを 水
 で うすめた。わたくしたちは
 家の まわりを きれいに そ
 うじて、その あとで べん
 じよの まわりや、いどの な
 がし場、下水、ごみすて場など
 に せきゆにゆうざいを まい
 て あるいた。

「これで さっぱりした。かも
 はえも 出なく なるよ。」

と、おとうさんは おっしやった。

この 時、わたくしは ふと 気が ついた。病気を
ふせぐには ただ 自分の からだに ちゅういするだけ
では いけない。まず きものや 夜具などを せいけつ
に しなければ ならないし、家の 中や その まわり
も きれいに しなければ ならない。わたくしたちの
学校も ていしゃ場も 村も 町も 同じように きれいに
しなければ ならない。

学校に 行ったら みんなに この ことを 話して
みようと思つた。

七 作 文

(一)

夕やけ 小やけで

日が くれて

はるおさんたちは うたい

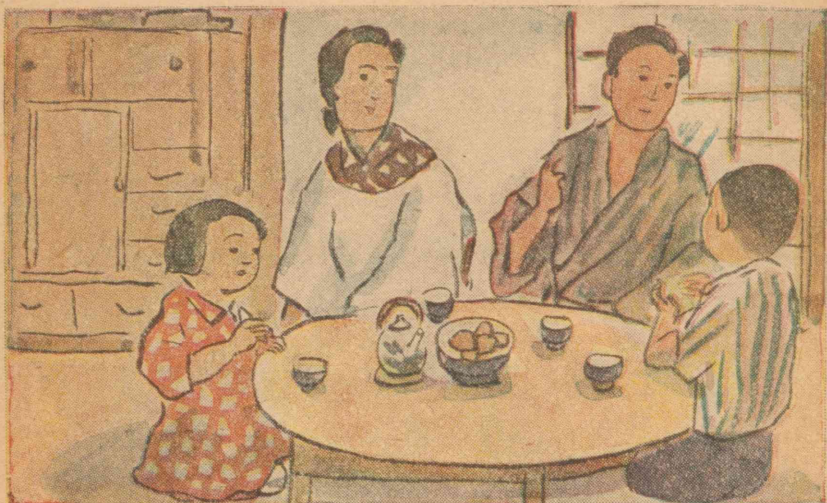
ながら 帰って 行きます。

西の 空が まっかです。

雲も まっかに なって

います。





はるおさんは 今まで こんなに 美しい けしきを
見た ことが なかったように 思いました。それで こ
の けしきを じょうずに 作文に 書いて みたいと
思いました。

(二)

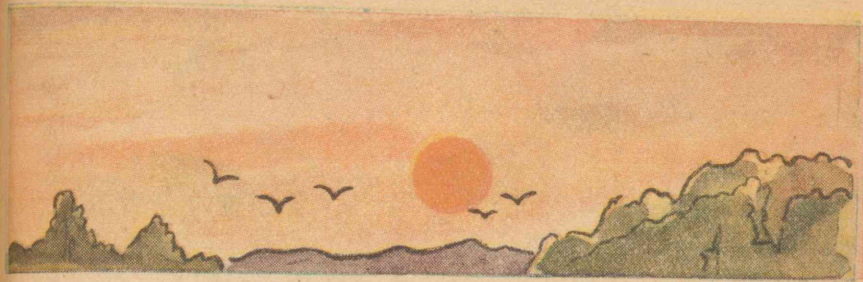
「おとうさん、きょう 夕やけの 空が とても きれい
だったので、ぼくは 作文に 書いて みたいのです。
どう したら じょうずに 書けるでしょう。」
はるおさんは おとうさんに たずねました。
夕はんが おわったばかりで みんなは ちゃのまに

あつまって いました。一日じ
ゆうで もっとも たのしい
時間です。

「はるおは ちかごろ よく
しつもんするようになった
ね。何でも わからない こ
どが あったら しつもんす
ると いいよ。」

と、おとうさんは にこにこ
しながら、

「作文はね、まず よく 見る



ことだよ。物をよく見る ことが
 一ばん 大せつなのだよ。じょうずな
 作文を よんで みると、ほんとうに
 よく 物を見て 書いて あるよ。
 空の 美しさを 書きたいのなら まず
 空を よく 見る ことだね。空が ど
 んな 色を して いるか、どんな 雲
 が うかんで いるか、そう した こ
 とを よく 目を はたらかせて 見る
 ことだよ。物を よく 見て 書いた
 作文は いきいきと して いるよ。は



いに 聞いて います。

「それから まだ あるよ。」

よく 見るだけでは たり

ない。じっさいに 書いて

みる ことが 大せつなの

だ。どんなに よく 物を

るおも 空の タやけを 書くのなら、
 よく 見て いきいきと した 作文を
 書くように すると いいよ。」
 おとうさんは ここで ことばを 切り
 ました。はるおさんは いっしょうけんめ



見ても それを 書いて みないでは まだ できあが
ったとは いえない。じっさい 書いて みると まだ
見方の たりなかつた ことに 気が つく ことが
ある。また 自分の 見た ことを 書くのに どんな
ことばを えらんだら よいか、それを 見つけるのは
なかなか むずかしい ものだ。物を よく 見て こ
とばを よく えらぶ、これが 作文を 書くのに 大
せつな ことだと おとうさんは 思うよ。
「おとうさん、ぼくは おとうさんの おっしゃったよう
に して 書いて みます。」

(三)

はるおさんは あくる日 もう
一ど タヤけの 空を よく 見
て 「タヤけ」と いう 作文を 書
いて みました。
「どんな 作文が できたでし
う。」



みなさんも はるおさんの おとうさんが いった こ
とに 気をつけて、一ばん 書きたいと 思う ことを
書いて ござんなさい。

八 たてもの

(一) あき地の家

ある 朝、かどの あき地から
元気な かけ声が 聞えて きました。
た。

ぼくたちは あき地へ 走って
行きました。

まる太が 三本 くん で あります。その まわりで
大ぜいの 人たちが つなを ひっぱって います。



「どう して あんな ことを して いるの。」
いもうどの ゆき子は ふしぎそうに 聞きました。
「家が たつんだよ。それで 地面を かためて いるの」
さ。
ぼくは 少し とくいに なって おしえて やりまし
た。

あくる朝 学校へ 行く 時、あき地の 前に、にば車
が とまって いました。四五人の 人が 車の 上から
材木を おろして いました。

学校の 帰りに そこを 通ると、だいくさんたちが
はたらいて いました。



は、とんとんと 屋根の上にはこんで 行きました。
 はしの方から きれいに かわらを ならべて いき

ます。

にわでは さかんやさんが きざんだ
 わらを 土に ませて こねて います。

ゆき子が、

「あら、だいくさんが おもし

ろい ことを して いるね。」

と、大きな 声で いいました。

ぼくは あわてて、

「ちがうよ。 さかんやさんだよ。」

ザーク、ザーク、あちらでは 大きな
 のこぎりで 材木を ひいて います。
 トントントン、こちらでは 柱に また
 がって あなを あけて います。カン
 カンカン、シューツ、シューツ、にぎや
 かな 音が あたり いっぱいに ひび
 いて いました。

あき地の 家は もう すっかり 屋
 根の 形が できました。

屋根やさんが かわらを ひよいと かたに かついで



かべをぬる土をこねて いるんだよ。

と、おしえて やりました。

さかんやさんは しの竹を わって 組み合わせた 上に
かべを どんどん ぬって いきました。

ほね組の できた 家の中では、三人の だいくさんが
が せっせと 仕事を つづけて います。

ある 日、学校の 帰りに 家の中を のぞいて み
ると、もう とこのまが ついたり おし入れが できた
り して、すっかり 家らしく なって いました。

「あと 何日ぐらいで できあがるの。」

と、ぼくは だいくさんに 聞いて みました。

「まだ 二しゅう間ぐらいは かかるだろうね。」

だいくさんは そう いいながら 手を やすめずに
仕事を つづけて いました。

さかんやさんが 白い かべの うわぬりを しました。

たてぐやさんが しょうじや ふすまや ガラス戸を
はこんで 来ました。

たたみやさんが 新しい たたみを 車に つんで は
こんで 来ました。

家は すっかり できあがりました。

木ぎれや かんなくずが ちらばって いた にわも、
きれいに そうじが できました。

ゆき子が、

「新しい 家に どんな 人が 来るのかしら。」

と いいました。ぼくが、

「さあ。」

と いった、考えて いると、

「きつと わたしたちのような

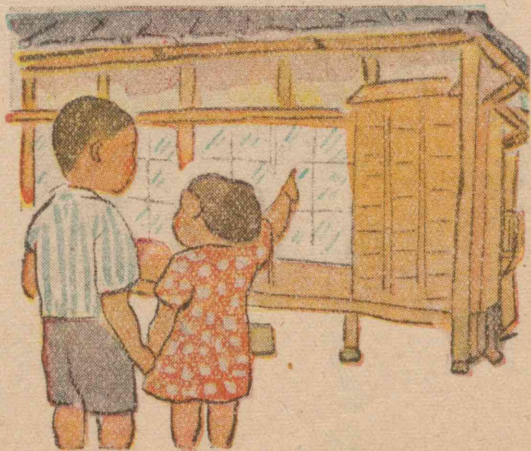
子どもも いると 思うわ。」

と いいました。ぼくは、

「そんな ことは わからないよ。」

と いいました。けれども 友だちに になれるような

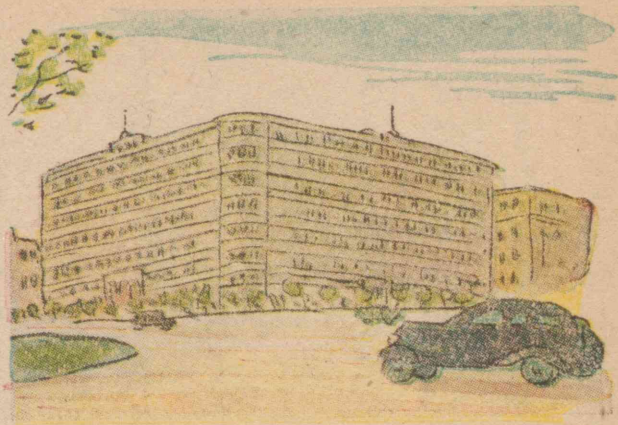
子どもが いれば よいと 思いました。



(二) いろいろの たてもの

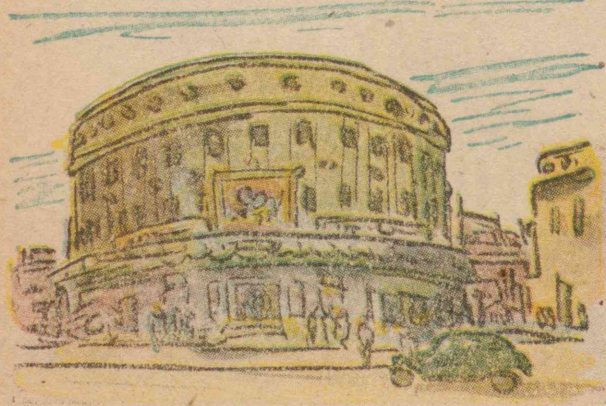
はるおさんと ただしさんと よし子さんが、はるおさ
んの おじさんから 話を 聞いて います。おじさんの
ひざの 上には「大きな たてもの」と いう 本が のっ
て います。おじさんは その 本の ページを めくり
ながら、

「さあ、みんなに 大きな たてものの シャしんを見
せて あげよう。これが どうきょうで 有名な まる
のうちビルデングです。地上は 八かいで、地下の ニ
かいを 合わせると へやの かずが 八百五十も あ

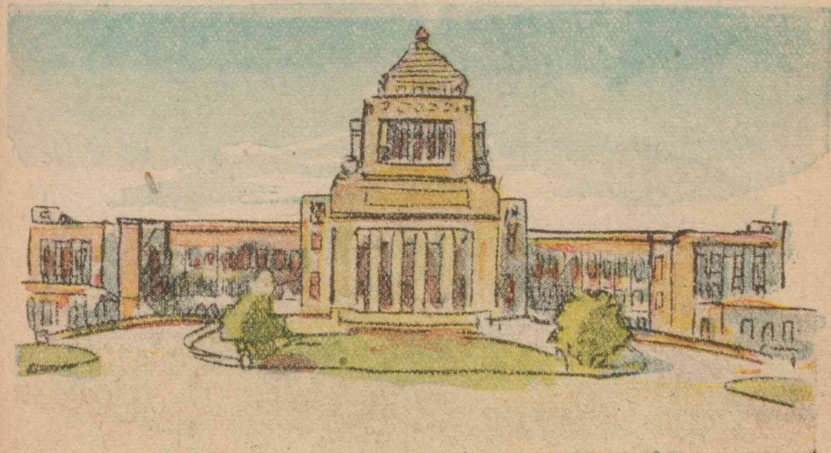


ります。昼間、この たてものの
 中ではたらいて いる 人は だ
 いたい 七千人、会社の かずは
 七百ぐらいも あるそうです。
 ずいぶん 大きいでしょう。こう
 いう たてものを ビルデングと
 いいます。ビルデングは てっきん
 と いう てつの ほうを ほね組
 に して コンクリートで ぬりかためて あります。
 それで、じしんや 火事や 風などの ために こわさ
 れるような ことは あまり ありません。

たくさんの 人が いっしょに はたらく ぎんこうや
 会社などの 大きな たてものは、たいてい この て
 っきんコンクリートだてに なって います。つぎの
 ページを ごらん下さい。しんぶ
 ん社の たてものが ありますね。
 これも ビルデングです。ずい
 ぶん 大きいですね。つぎは げ
 きじょうです。この たてものは
 たくさんの 客が はいれるよう
 に ふつうの ビルデングと 少
 し 形が ちがって います。



ほら、こんどは こっかいぎじ
どうですよ。ここで 日本の
せいじが いろいろ そうだん
され、とりきめられて いるの
です。それから まだ ありま
すよ。ほら、これが ほうそ
きよくですよ。ここから ラジ
オが ほうそうされるのです。
これが どうきょう大学です。
これが ホテルです。』
「日本では 八かいの まるのう」



ちビルデングが 一ばん 高いのですか。』
と、はるおさんが 聞きました。

「いいえ、おおさかには 十かいだての ビルデングが
あります。これが 日本で 一ばん 高いのです。しか
し アメリカには もっと もっと 高い ビルデング
がありますよ。ニューヨークと いう 大きな 都会
には、二十かいだて 三十かいだてなどの 大きな ビ
ルデングが たくさん ならんで いるそうです。中に
は 百二かいだての 空に とどくかと 思われるよう
な 高い ビルデングも あります。』
「百二かいだてなんて 山より 高いでしょうね。」

と、ただしさんが 目を

まろく しながら 聞きました。

「そうです。小さな 山よりは
ずっと 高いですよ。」

と、おじさんが いいました。

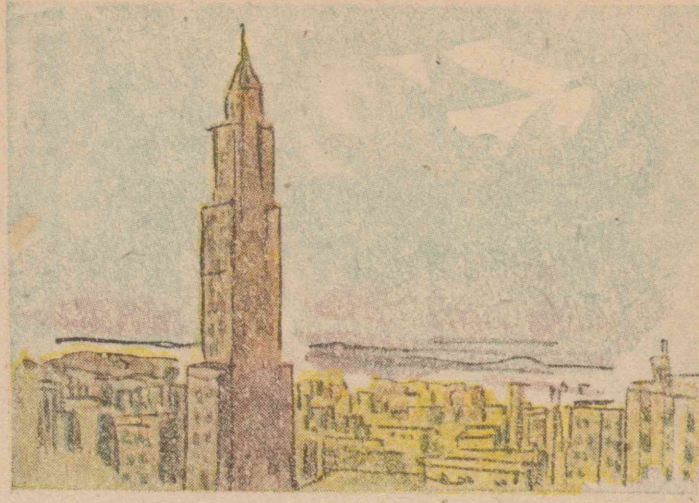
「そんな 高い たてものでは
上まで のぼるのに 大へん
でしゅうね。」

と、よし子さんが いいました。

「ですから こう いう たて

ものの中には エレベータ

ーと いう ものが あって、電気ので 早くす



うっと のぼって 行けるように なって いるのです

よ。

と、おじさんが いいました。

「人間って えらいんですね。」

と、はるおさんが かんしんしたように いいました。

「そう、人間は えらいですよ。しかし こう いう り

っぱな 高い たてものをつくるまでには、いろいろ

な 苦心を して きて いるのです。大むかしには、

人間は みんな 地面に あなを ほって、その あな

の中に 住んで いたのですよ。あなに 住んで い

ると、風が 通らなかつたり しめっぽかつたり いる



「家には まだ いろいろ かわった たて方の ものが
あります。 高い 木の 上に つくった 家や ふねの
中に つくった 家などが ありますよ。」
「どう して 木の 上になんか つくるのでしょう。」

ど、はるおさんが 聞きました。
「どう して ふねの 中にな
んか つくるのですか。」
ど、よし子さんが 聞きました。
「それはね、 あついで 国の 森
の 中には たくさん どん
をもった 虫や 動物が

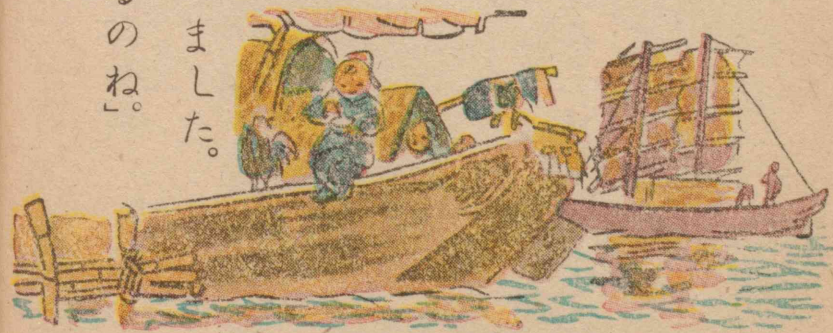
いる ふべんな ことが 多いので、
地面の 上に 家を たてるように
なったのです。 土で たてたり 石
で たてたり 木で たてたり す
るように なりました。 そうして
いろいろ くふうする うちに た
んだん りっぱな ものに なって
いって、 今 わたくしたちが 住ん
で いるような 家になつたのです。」
おじさんは そう いった みんなの かおを 見まわ
しました。



いるからです。そう、いう、どく虫な
どにかまれないように、高い木の
上に、家をつくるのです。

それから、ふねの中の家は、一年
じゅう、大きな川をのぼったり
くだったりして、くらしして、いる
人たちが、つくるのです。その方が
べんりだからですよ。

と、おじさんは、本を、どじながら、いいました。
「おもしろいね。家って、いろいろ、あるのね。」
と、みんなは、かんしんしました。



九 水の話

(一)

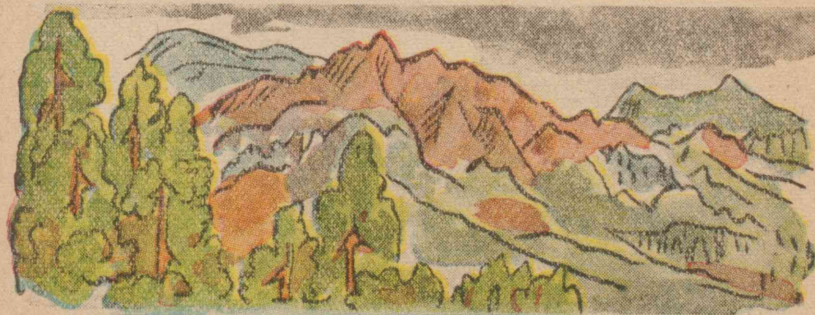
ぼくは、雲だった。その前は、どこに、いたのか、知
らない。気がついた時には、ぼくは、友だちと、いっ
しょに、どンドン、下の方へ、落ちて、いた。

「いったい、これは、どう、したんだ。」
ぼくは、友だちに、聞いた。

「ぼくたちは、雨と、いう、ものに、なったのだ。」
「こんな、いきおいで、落ちて、山に、ぶつかったら、い」



たいだらうね。
 「それは そうだ。でも
 いたい ことなんか
 すぐ わすれるよ。お
 もしろい 旅が はじ
 まるんだからね。あつ、
 もう ところが 山だ。大へんだ。あの
 岩に ぶつかっては、さすがの ぼく
 も たまらないよ。きみ きみ、きみ
 は あの こんもりと しげった 林
 に とびおりたまえ。なに、むずかし



い ことなんか ないよ。風さんに ちよつと たのめ
 ば つれて 行って くれるよ。
 ぼくは 友だちの いって くれたように 風に ちよ
 っと 乗せて もらって、林の 一ばん やわらかそうな
 えだに とびおりた。ぼくは その えだを つたわって
 下におりた。それから くまざさの 根もとや 草の
 根もとを つたわって 流れ
 はじめた。だんだん 低い
 方へ 低い 方へと 行くの
 が ぼくたちの せいしつら
 しい。右も 左も ぼくたち



の 友だちが、同じように 低い 方へ 流れて 行く。
ぼくは 流れながら くまざさに たずねて みた。
「くまざさくん、いったい ぼくは どこへ 行くのたろう。」

「そんな ことは ぼく 知らないよ。ぼくは 生まれて から ここしか 知らないんだからね。もう じき しかさんが 通るだろうから 聞いて くらんよ。」
くまざさは そう 答えた。
くまざさの いった とおり、 しかが 三びき ぼくたちの 上を 通りすぎようと した。ぼくは あわてて しかの 足に とびついた。

「しかさん、しかさん。ぼくは いっ たい どこへ 行くのたろう。」
しかは しばらく ぼくの かおを 見て いたが、

「谷川へ 行くのだよ。」
「谷川って どこですか。」
「そら、そこに 見えて いるじゃ ないか。」

と、 しかは 谷川を ゆびさした。
なるほど、そこには ぼくたちの 友だちが もみあいながら、 白い あ



わを たてて 流れて いる。
やがて ぼくは しかの いったように みんなと い
っしょに 谷川に 流れこんだ。



(二)

谷川では、ぼくは 友だちと 岩に
ぶつかったり 岸に ぶつかったり し
て、元気 よく かけくだった。
谷川は だんだん ひろく なって
いった。ぼくたちは 大ぜいで かたを
組んで 流れて 行った。流れは だん

だん ゆるやかに なった。

赤どんぼが どんで 来たので、

「ここは どこですか。」

と、ぼくは 聞いて みた。

「村里だよ。」

「村里って 何ですか。」

「人が 住んで いる 所だよ。」

そう いわれて 上の 方を

見ると、なるほど 人が いっ

しょうけんめい いねを かって

た。





「ごめん、ごめん。ぼくは水車と、いうものなんだ。きみたちの力をかりて、こうしてぐるぐるま

「いや、そんなに、ざんねんがらなくていいよ。ぼくを、ちょっとまわして、くれたまえ。」
いきなり、上の方で、声がした。きゆうに、ぼくは、小さな、みぞに、すいこまれて、あっと、いうまに、大きな、車に、まきこまれた。「らんぼうだな。」
ぼくは、びっくりして、どなった。



ねんだね。」

と、ぼくは、いった。すると、

友だちが、ものしりがおに、いった。「あの、いねは、この、夏、うえたんだよ。その、時、この、川を、下って、行った、ぼくたちの、なかまは、田の中へ、は行って、行って、いねを、うえたり、そだてたり、する、手つだいを、したんだそう、だ。」
「そうか、ぼくたち、おひやくしゅうさんの、手つだいが、できなくて、ざん



りの けしきを 見物した。
子どもが 走って いる。ボールを 打
ち合って いる。おもしろそうだなと 思
って 見て いると、ぼくの そばに や
って 来た ふなが、あれは 野球を し
て あそんで いるんだよと おしえて
くれた。
ぼくは その 時、あっと おどろいた。
むこうの 家の にわで 女の 人が ガ
ッチャン ガッチャンと 音を たてて
ポンプを おして いた。その たびごと

わって いるんだ。そして おひゃくしょうさんの 小
麦を こなに して あげて いるんだよ。
ど いう 声 が 聞えた。
ぼくは はらが 立ったけれども、おひゃくしょうさん
の 役に 立ったのかと 思って、うれしい 気が した。
水車に わかれて、ぼくたちは また ゆっくりと 流
れて 行った。
まもなく 土橋の 下を 通りかかった。ここで ぼく
たちは 新しい 友だちを 加えて ますます 大きく
なった。ぼくたちの 両側に 家が たくさん ならんで
いた。ぼくは ゆるやかに 流れながら ゆっくり あた

に ぼくの 友だちが まっ白な あわに なって とび
出して いた。 ぼくと いっしょに 空から おりて 来
た 友だちの かおも 見えた。 ぼくが 待って いると、
しばらく して その 友だちは 低い 所に いる ぼ
くの 前に 流れて 来た。

「おい。」

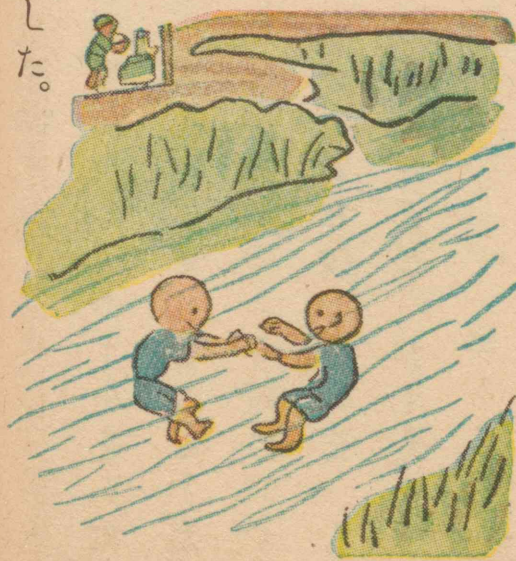
と よびかけると、 友だちも

おどろいたらしく、

「なんだ、 きみか。 また あ

ったね。」

と、 うれしそうに にこにこ した。



友だちは ぼくと わかれてから 草むらに とびおり
たのだそうだ。 あまり 元気 よく とびおりたので 土
の 中にもぐりこんで、 その まま 土の 間を 流れ
て 来たのだそうだ。 ところが ふいに、 からだが どん
どん 上の 方に あがって 行くので びっくりして
いると、 ポンプの カで すいあげられたのだと いう。
それから 友だちは バケツに 入れられ、 茶わんを
あらっただけで いどばたに 投げすてられたのだそうだ。

ぼくは この 話を 聞いて、

「よかったね。」

と いった。

ふたりは 手を つないで また、流れはじめた。

(三)

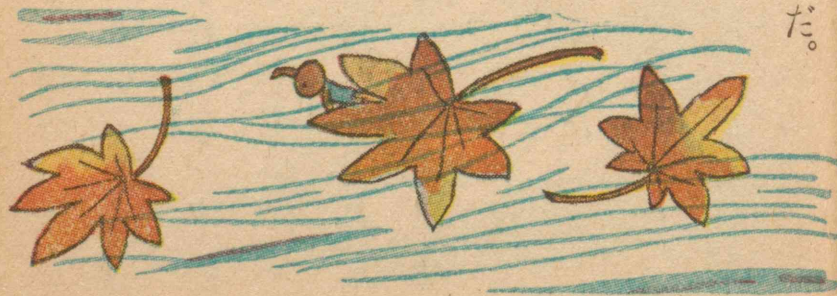
「きれいな 水だなあ。もみじや 空が うつつて えの
ようだ。」



いきなり 上の方で ぼくたちを ほめる 人の 声
が した。もみじや ぼくたちを
見に はるばる とおい 都会から
来た 人たちだそうだ。ぼくの 上
に 落ちて 来た もみじの はが
そんな ことを おしえて くれた。

やがて ぼくたちも 都会へ 行くのだそうだ。

ぼくは もみじの はを ぼくの 上に
のせて 流れて 行ったが、その うちに
ぼくたちは 流れなく なった。そこは
大きな みずうみだった。ぼくは 三日ほ
ど みずうみの 中を、ゆらりゆらりと
ゆれながら 長い 旅の からだを やす
めた。四日目の 朝、ぼくは もみじと
わかれた。もみじは もう ねむく なっ
たから みずうみの 底に しずむのだと
いって いた。



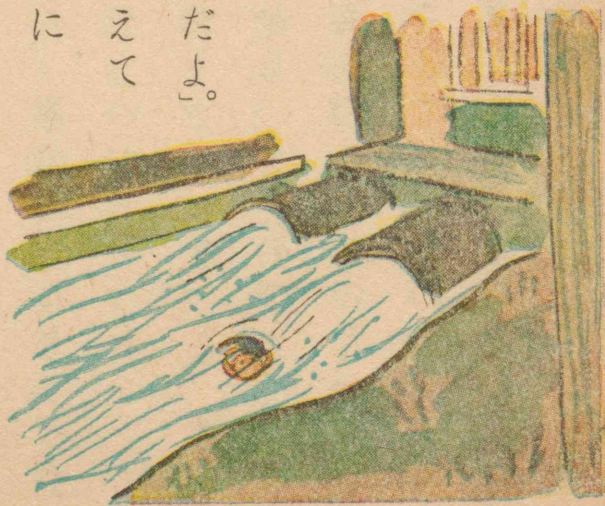
友だちが たくさん そうだんして いる 所へ ぼく
は 近よって 行った。ここから 都会へ 行く 道が
二つ あるのだが、その 一つは この きれいな すが
たの まま、上水道と いう 所を 通って しずかに
流れながら 都会へ 行く 道、もう 一つは ずっと
大きな 川に なって、人の ために いろいろな 仕事
を しながら とおまわりを して 都会へ 行く 道、
どちらを えらぶかと いう そうだんで あった。

ぼくは あとの 方の 道を えらぶ ことに した。
ぼくは 友だちと しずかに 流れはじめた。まもなく
ぼくは 高い がけの 上から 大きな てっかんの 中

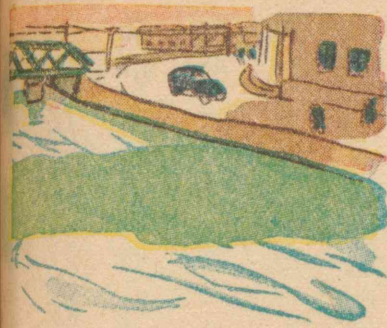
へ 落ちて 行った。ぼくは
目が まわった。気が ついた
時には もう 大きな 川を
流れて いた。

「やっど 気が ついたね。今」
のは 大きな 発電所だったのだよ。
そう いった 友だちが おしえて

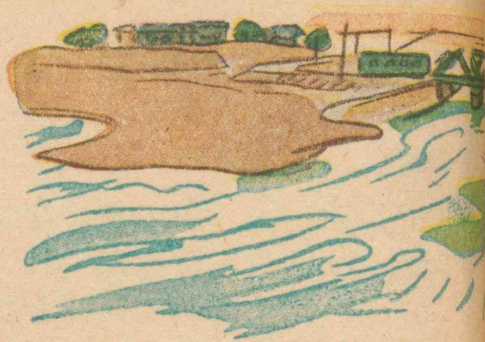
くれた。ぼくたちは 大きな 川に
なって ひろい 平野の 中を 流れて 行った。
やがて 今までに 見た ことも ない 大きな 町に
たどりついた。ここが 都会だそうた。



ぼくたちの 上には 大きな 橋が わたされて、その
上を 汽車が 走って いた。自動車や 電車や 人が
わたって 行く 美しい 橋も あった。大きな ふねが
ぼくたちの 上を 通って 行った。岸の ビルデングが
ぼくたちの 上にかげを 落して いた。
しばらく して きゆうに しおくさく なった。それ



は 川下の 方から さかのぼって 来
る 新しい 友だちの においだった。
ぼくは なぜ そんな においが する
のか 新しい 友だちに 聞いて みた。
「ぼくたちは 海の 水だからだよ。」



新しい 友だちは わらって 答えた。
「きみたちは どこまで のぼって 行
くんだ。ぼくたちは 低い 方へ 流
れて 行く ものだとばかり 考えて
いたのだが、きみたちは ずいぶん
かわりものだね。」

と いうと、友だちは あっはっはと わらって、
「きみは まだ 知らないのだよ。きみが もう 少しで
たどりつく 海と いう 所が、ぼくたちの すみかな
んだ。ぼくたちが こう して 川を さかのぼって
行くのも 海の せいしつの 一つなんだよ。」

そう いいながら 海の 友だちは ぼくの 手を にぎって、川上の 方へ つれて 行った。強い 力だ。川上の 方から 流れて 来る 友だちの 力と 海の 友だちの 力とに はさまれて、ぼくは 気が とおくなりそうだった。ぼくの 苦しそうな かおを 見て、

「今に なれるよ、もう しばらくの しんぼうだよ。」

海の 友だちは そう いった。

海の 友だちの いった とおり、ぼくは 苦しきにも しておくさい においても すぐ なれた。やがて ぼくは ひろい ひろい 海に 流れこんだ。海は 水の すみかだと 聞いたが、ほんとうに そうだと ぼくは 思った。

べんきょうの手びき

一 花

(一) 「花」の しをいくども よんで、

本を 見ないでも いえるように にくいこみましょう。

(二)

1 あなたも ちょうめんに 花の名を たくさん 書いて みて でしょう。

こんどは つぎのような ひよ。

花の名	花の	花の色	この花から思
さく	月	い	出すこと

うを 作って、みんなで 話し

合いながら 書き入れて みて

しょう。

2 書き方の けいこ。

さくらの 花びらが 雪のよう

に まいおちて います。

二 たんじょう日

(一)

1 よし子さんの たんじょう日は いつてしょうか。

たんじょう日には だれが よばれて 来てしょうか。

2 よし子さんは おかあさんの

話を きいて、どう して 手

を たたいて よろこんたのでしょうか。

(二)

1 よし子さんの たんじょう日に、友だちは 何時に 来る やくそくだったでしょうか。

2 六人の 友だちが そろってか、ら、おとうさんは 何と おっしやいましたか。ちようめんに書いて みましよう。

3 つぎの ふんは どう ちがいますか。

「うたいながら おどりました。おどりながら うたいました。」

4 書き方の けいこ。時間を はかる。早く 来る。

友だち。話を した。一本道を とおる。雨戸を あける。

(三)

1 みんなで 「十の とびらを して あそびました。」「しつもん」とは たずねる ことです。じようずに しつもんすると 早く 答えられます。

2 だれの しつもんが じようずなので、うまく「すずめです。」「と 答えられたでしょうか。

3 だれの しつもんが じようずなので、うまく「それは あひるです。」「と 答えられたでしょうか。

4 「つばめ」と いう だいて、み

じかい 作ぶんを ちようめん に 書いて みましよう。

5 書き方の けいこ。

空を 鳥が とぶ。米が すきです。元気の よい 鳥です。

日本の 国。黒い 鳥です。海を わたる 鳥が あります。

南の 国へ 帰る 鳥が あります。

三 つばめ

(一)

1 つばめの しを いくども よんで、本を 見なくても いえるように しましろう。

2 つばめが 「すずめ」「とびとていろう ことは どんな ようす

の ことでしょうか。

○はやく とぶ ことです。

○かるく 早く とぶ ことです。

○ひらひら とぶ ことです。

○ひらりひらりと とぶ ことです。

この 四つの うち、どれが

一ばん よい 答でしょうか。

3 この しは、どう して ちようし よく よめるか、みんな で 考えて みましよう。

(二)

1 この につきは つばめの ことを 書いた につきです。気をつけて よむと、つばめの いろいろ な ことが わかりま

す。みんなて話し合つてみましよう。

2 つぎのことに答えられますか。

つばめは どんなに 早く
とぶてしょうか。

つばめは いくつぐらい たまごを うむてしょうか。

つばめの たまごは いく日 ぐらいで ひなに なるてしょうか。

3 つぎの「、、、」をつけたことは どう ちがつて いるか、考えて みましよう。

五月四日 つばめは たまごから かえつた。

つばめは 南の 国へ かえつた。

4 書き方の けいこ。

汽車より 早い 鳥。学校から 帰る。首を のばして さわぐ。

電線に とびうつた。

四 ゆきしかさん

(一)

1 山の 中の ほらあなに すんで いた しかに、どう して

「ゆきしか」と いう 名まえが ついたか、その わけを ちょうめんに 書いて みましよう。

2 みんなは どう して ゆきしかさんに 一ど あつて みたか、 くなったか、その わけを

話し合つて みましよう。

(二)

1 四人の こどもたちは ゆきしかさんを 見に行くと どちらゆうで どんな ものを 見たか、 ちょうめんに 書き取つて みましよう。

2 四人の こどもたちは 山の 上で ゆきしかさんを見たてしょうか。話し合つて みましよう。

3 みんなで ゆきしかさんの かみしばいを 作つて みましよう。

五 ぼくの 作った おもちや

(一)

1 みのるが いった「自動車。トラックでも いいよ。」とは

どんな ことでしょうか。つぎの 答の うちで 一ばん よい 答に ○の しるしをつけて みましよう。

「自動車でも トラックでも どちらでも いいよ。」

「自動車も トラックも りょう方 ほしいよ。」

「自動車が ほしいけれども、 トラックでも いいよ。」

(二)

1 自動車を こしらえようとして 苦心して いる ところを 本から ぬき書きましよう。

2 あなたも 本に書いて ある
ような 自動車を こしらえて
みましょう。

3 書き方の けいこ。

乗用車が 走る。自動車を 作
る。手本を 見て 作る。材料
を あつめる。

六 病気を ふせこう

(一) はえ

1 はえは どんなに きたない
虫か、みんなて 話し合つて
みましょう。

2 はえを ふやさないように す
るには どうすれば よいか、
みんなて 考えましょう。

3 みんなで はえを ふやさない

ように する ポスターを 考
えて 書いて みましょう。

(二) ふどんほし

1 なぜ ふどんほしを するので
しょうか。その わけを 本を
見ないで ちようめんに 書い
て みましょう。

2 せきゆにゆうざいは どんな
所に まくと よいでしょうか。

あなたの 学校では どこに
まいたら よいか、みんなて
話し合つて みましょう。

3 「病気を ふせこう」とい
う だいて 作ぶんを 書いてみ
ましょう。

七 作文

(一)

なぜ はるおさんは、作文を
書いて みたく なつたのでし
ょうか。

(二)

1 作文を 書く 時には どんな
ことが だいじな ことでしょ
うか。だいじな ことを ニつ
書いてみましょう。

2 「よく 見る。」とは どうする
ことでしょうか。よく 見て

書いた 作文は、どんな 作文
に なるでしょうか。
3 作文を 書く 時に「ことを
えらぶ。」とは どうする こ
とでしょうか。

(三)

作文を 書いて みましたか。
あなたの 作文を よんで み
て よく 見て 書いたか、こ
とばの えらび方が よかった
か、よく 考えて みましょう。

ハ たてもの

(一) あき地の 家

1 つぎの 文は どう ちがうで
しょうか。

「家が たつたよ。それで
地面を かためて いるのさ。」
「家が たつたろう。それで
地面を かためて いるのさ。」
2 「学校の 帰りに、そこを 通る
と、あき地で、だいくさんたち

が はたらいて いました。」の
文で、「そこを」とは どの
ことか、本で しらべましょう。
3 家が すっかり できるまでに
は どんな 人が はたらくか、
本で しらべて ちょうめんに
書いて みましょう。

4 かなづかいの まちがいを な
おしましょう。
せつせと 仕事お つづけて
います。

かへの うはぬりを しまし
た。
木ぎれや かんなくづが ち
らばって いる。
すこしづつ はこびました。

(二) いろいろの たてもの

1 本から いろいろの たてもの
の 名を ちょうめんに 書き
取って みましょう。

2 どちらの 文が「」の うち方
が よいてしょうか。

ビルデングは てっきんと
いう てつの ぼうを ほね
組に して、コンクリートで
ぬりかためて あります。

ビルデングは てっきんと
いう てつの、ぼうを ほね
組に して コンクリートで
ぬりかためて あります。

3 つぎの 文は どのようにに ち
がうてしょうか。

あついで 国の 森の 中には、
たくさん どくを もった
虫や 動物が います。
あついで 国の 森の 中には、
どくを もった 虫や 動物
が たくさん います。

九 水の話

(一)

1 この 話に 出てくる 「ぼく」
は 水です。水は だれと ど
んな 話を したか、本で し
らべて ちょうめんに 書きま
しょう。
2 本を よんで つぎの 文の
わるい 所を なおして みま
しょう。

(イ) 林に 一ばん やわらかそう
な えだに とびおりた。
(ロ) くまぎさの 根もとを 草の
根もとを つたわって 流れ
はじめた。

(ハ) やがて みんなを いっしょ
に 谷川に 流れこんだ。

3 書き方の けいこ。
雲が 走る。おもしろい 旅で
す。草の 根もと。低い 方へ
流れる。

(二)

1 つぎの ことばの わけを し
らべて ちょうめんに 書きま
しょう。
村里。水車。見物した。

2 書き方の けいこ。

かたを 組んで 流れる。土橋
の 下を 通りかかった。新し
い 友だちを 加える。家が
両側に ならんで いる。野球
をして いる。

(三)

1 「水の話」を よんで つぎの

ことが どんな じゆんに な
って いるか しらべましょう。
そして 本と おなじ じゆん
にして みましょう。
(1) みずうみの 中で からだを
やすめた。
(2) もみじの はを のせて 流
れる。

(1) ここから 都会へ 行く 道

が 二つ ある。
(2) その 上を 汽車が 走って
いた。

(3) 大きな てっかんの 中へ

落ちて いった。

2 書き方の けいこ。

都会から 来た 人たち。底へ
しずむ。上水道を しずかに
流れる。発電所を 通る。美し
い 橋。強い 力。

3 「水の話」を みんなで かみ

しばいに 作って みましょう。

4 あなたも 「水の 旅」と いう

だいで 作文を 書いて ござ
んなさい。

あたらしく 出た おもな ことば

○あかちゃん

あき地

あじさい

あひる

雨戸

あやめ

○いきいきと

板

いど

○うつる

うらしま

うわねり

○えだ

えらい

(18)

(78)

(9)

(24)

(20)

(8)

(74)

(19)

(69)

(5)

(46)

(83)

(97)

(91)

エレベーター

○おかず

おしいれ

おそろしい

おそわる

おどる

大むかし

おまんじゅう

おみなえし

○がけ

かさねる

かすめる

かたづける

かたまる

(90)

(65)

(82)

(63)

(54)

(18)

(91)

(14)

(8)

(110)

(57)

(28)

(60)

(32)

かためる

かど

かべ

ガラス戸

かんたん

○まきょう

まぎむ

またない

まもの

まきり

まき色

まきこり

○苦心

組み合わせる

(79)

(78)

(82)

(83)

(58)

(8)

(81)

(64)

(70)

(58)

(40)

(87)

(91)

(82)

せきゆにゆうざい (68) せきり (63) せきりきん (64) センチ (57) ○そうじする (69) 底 (109) ○だいどころ (53) たたみ (83) たてぐやさん (83) たどりつく (111) たのむ (97) ダリヤ (3) ○ちえ (18) 地下 (85) 地上 (85) ちゃのま (72)

茶わん (107) ちゅうもん (55) チューリップ (8) ちょうチフス (63) ちらばる (83) ○使う (57) 月見そう (8) つたわる (97) つつみ (6) つば (64) つばき (8) つばめ (27) つみ木 (53) ○てっきん (86) 手本 (56) てっかん (110)

天気 (68) 電線 (36) ○どく (93) どく虫 (94) どのま (82) とじる (94) とびら (21) とりきめる (88) ○名 (7) ながし場 (69) なてしこ (8) なのはな (3) ○人間 (91) ○ぬりかためる (86) ○のこぎり (80) のり (57)

くらす (94) ○けきじょう (87) けしき (72) 下水 (69) けずる (19) 見物する (105) ○ごちそう (18) こっかごご (88) こな (104) こねる (82) 小ぼうず (19) ごみすて場 (69) 小麦 (104) こわす (86) コンクリート (86) ○材木 (80)

材料 (58) さかのぼる (112) さかんやさん (81) 作文 (71) さくら (6) さしわたし (11) さすがの (96) さっぱりする (69) ざぶどん (68) ざんねん (102) ○しおくさい (112) しか (98) しきい (20) じしん (86) しずむ (109) じっさいに (75)

しつもん (21) しの竹 (82) しめっぽい (91) しめりけ (67) しゃしん (85) 車体 (58) しょうじ (83) 上水道 (110) 乗用車 (56) しんぼう (57) ○すいあげる (107) すいせん (8) すずしい (27) ○せいけつ (70) せいじ (88) せいしつ (97)

平	橋	森	新	美	病	形	聞	重	野
(111)	(104)	(93)	(83)	(72)	(63)	(53)	(32)	(11)	(4)
強	加	旅	有	物	知	用	親	友	歩
(114)	(104)	(96)	(85)	(74)	(63)	(56)	(34)	(13)	(4)
側	林	百	地	落	台	首	計	雲	
(104)	(96)	(85)	(78)	(65)	(57)	(34)	(15)	(5)	
打	草	会	面	具	使	電	板	雪	
(105)	(97)	(86)	(79)	(66)	(57)	(36)	(19)	(6)	
球	流	社	通	天	同	線	千	名	
(105)	(97)	(86)	(79)	(68)	(57)	(36)	(19)	(7)	
待	低	客	柱	屋	体	乘	戸	朝	
(106)	(97)	(87)	(80)	(68)	(58)	(40)	(20)	(8)	
茶	岸	都	根	古	材	岩	鳥	夏	
(107)	(100)	(89)	(80)	(69)	(58)	(50)	(21)	(9)	
投	里	苦	組	場	料	動	帰	考	
(107)	(101)	(91)	(82)	(69)	(58)	(51)	(27)	(9)	
底	麦	心	仕	文	太	切	晴	南	
(109)	(104)	(91)	(82)	(71)	(61)	(53)	(31)	(11)	
発	役	住	事	今	持	角	金	国	
(111)	(104)	(91)	(82)	(72)	(62)	(53)	(32)	(11)	

ふしぎ	ふじ	ふくじゆそり	○ふいに	ビルデング	ひまわり	ひな	ひとりごと	○ひぎ	ばら	はりがね	はば	柱	はし	はえ	○ばいぎん
(31)	(8)	(8)	(107)	(85)	(8)	(33)	(68)	(85)	(8)	(58)	(57)	(80)	(31)	(63)	(63)
みずうみ	○見方	まる太	マツチばこ	またがる	○まじる	ほらあな	ほね組	ホテル	ぼたん	ほうそりする	○ほうそりきよく	○べんり	古バケツ	ふべん	ふつう
(109)	(76)	(78)	(20)	(80)	(64)	(40)	(82)	(88)	(8)	(88)	(88)	(94)	(69)	(92)	(87)
わる	○わたり鳥	ラフレッシア	○ラジオ	ゆり	○クがお	やまぶき	やなぎ	夜具	野球	○やかましい	○もも	めんどう	○めくる	むすびつける	○むずかしい
(82)	(26)	(11)	(88)	(8)	(8)	(8)	(29)	(66)	(105)	(34)	(7)	(58)	(85)	(61)	(20)

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田 国男
 編集委員 東京教育大学教授 岩井 良雄
 国立国語研究所員 岩淵悦太郎
 民俗学研究所理事 大藤 時彦
 東京杉並第四小学校校長 上飯坂好実
 山梨大学教授 鳥山 榛名
 東京学芸大学助教授 橋本芳一郎
 東京書籍株式会社編集部

さしえ及び装てい

山下大五郎

あたらしいこくご三ねん上(小) (第三学年前期用) 小国三〇七

昭和二十五年二月十日 第一刷発行
 昭和二十五年十月一日 第二刷印刷
 昭和二十六年二月二十日 第二刷発行
 (昭和二十四年十月十日 文部省検定済)
 定価 四十八円

Approved by Ministry
 of Education
 (Date Sep. 12, 1950)

著作者 東京書籍株式会社編集部
 代表者 藤田 貞次
 発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社
 代表者 山田三郎太
 印刷者 東京都台東区二長町一番地
 凸版印刷株式会社
 代表者 山田三郎太

発行所 東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中)



広島大学図書

0130449879



広島大学図書

0130449879



東京書籍株式会社

庫

9

79